

1 A S M R 音声作品 前日譚
2 『処女じゃなくヤバいもんね。～俺とのエッチで余裕な彼女の性歴～』
3 常世クラク
4

5 私のような女には、コーヒーは劇薬だ。
6
7 夢のような快楽への陶酔から、つまらない現実に心を引き戻し。
8 自分が理性を持った一人の人間だとこいつを意識させ。
9 忘れようとしていた罪悪感をも、無理矢理に思い出させる。
10
11 けれど激しいセックスで疲れた体は癒されたいと願い、この香ばしい味と香りを求める。
12 もののコーヒーには、ある種の魔力のような何かがあるのかもしれない。
13
14 いつものラブホテル。その一室で、私は昼間に起きたあのノルマについて考えていた。
15
16 私を好きだと言つてくれた彼。
17 入社当時から励まし合つてきた同僚。
18 彼をいわゆる「そういう目」で見たいとはなかつた。
19 それでもあんな風に真摯な態度で好意を伝えられたし、私も真剣に考え方を得ない。
20 でも私は釣り合つただろうか？ あんなに真面目で、真っ白な人に……。
21
22 「あ、部長。おかえりなさい」
23
24 シャワーを浴び終えた部長は、カップの両端を両手で持ち、匕のれた子供のようになぞらへ
25 丸まつている私を見つめた。
26 それから私の肩をそっと抱き、寄り添つてくれる。まるで私をあやすように。
27
28 このカップの温かみもいざれ冷めてしまう。
29 部長の私への興味も、そんな風に冷めてしまつただろうか。
30 今まで私の横を通り過ぎていつた男の人たちと同じように。
31
32 それが頭のいいかではわかつていいふこのに。
33 私は今ノリにある体温に縋つてしまつ。
34
35 飲みかけのカップをベッドサイドに置き、バスローブを脱いで部長に向かひう。
36

37 「んい……。わゆい……」

38

39 ベッドに優しく押し倒されながら、唇を重ねる。

40 キスをするたびに私の中のカフェインは希釈されていいく。

41 分厚い肉の重み。シワと脂に塗れた肌の感触。

42 そしてアルコールとタバコの混じった息の匂いが、私を犯す。

43 「わゆい、部長……。わいとふくべだわい……」

44

45 腕を絡め、舌を絡め、脚でぐりと部長の腰を引き寄せて密着する。

46 今夜はもういい。すべて忘れてまた明日考えよう。

47

48 そう思つた私の脳裏に、同僚の彼の顔が浮かんだ。

49

50 体はすでに部長のモノになつていて。心も快樂で埋め尽くされている。

51 52 なのに。

53

54 どうして彼の顔が浮かぶのだろう。

55 もしかすると彼なら。

56 私にずっと優しくしてくれた同僚の彼なら。

57 こんなにもいやらしい自分を受け入れてくれるかも。

58

59 いや違う。

60

61 私は私のありのままを、過去も今もひらくめてすべて、受け入れて欲しいのか。

62 それはあまりに欲張りで、自分勝手な考え方で……。

63

64 けれどそんな思考も一瞬のこと。

65 ベッドの軋む音が大きくなるたびに、私は快感の渦の中で曖昧になつていく。

66

67 朝目覚めた時。まだ意識がはつきりしない頭で。

68 最初に思い浮かべるのが彼の顔であることを願いつつ。

69 私はまたまじろむように、快樂の中へと落ちていった。